

高校は今——これからの高大接続・連携を考える《大阪府編》

企画の狙い

一九七〇年代の高等学校のユニバーサル化により、生徒の能力・適性、興味・関心、進路などが多様化し、生徒一人ひとりの個性を伸ばす高等学校教育が求められるようになった。それに伴って高等学校では、「習熟度別授業」や「少人数制授業」など、より一層こまやかな学習指導や進路指導、生活指導、キャリア教育などが行われるとともに、生徒一人ひとりの個性を伸ばす特色ある学校づくりが可能となるよう、「総合学科」や「単位制高等学校」「中高一貫教育」をはじめとする新しいタイプの高等学校や特色ある学科・コースの設置などが推進されてきた。

また近年の初等中等教育政策においては、「教育再生実行会議」において「グローバル化に対応した教育」に大きく軸が置かれた検討がなされるとともに、スーパーサイエンスハイスクール(SSHS)、スーパーイングリッシュランゲージハイスクール(SELHi)、スーパーグローバルハイスクール(SG

H)など、世界に通用するリーダー養成の動きが加速している。一方、大学も二〇〇〇年代にユニバーサル化を迎え、多様な学生の円滑な大学教育への接続を図るべく、「初年時次教育」や「リメディアル教育」などを実施するほか、社会や経済のグローバル化の進展を踏まえ、主体的に考え行動する力を持ち、多様な価値観の人々をとりまとめ社会全体の新生を担うことのできる人材の育成に力を注ぐべく、教育の質の確保・保障に向けた各種方策に取り組んでいる。

このように各学校段階における改革が進む一方で、平成二十四年八月二八日、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ——(答申)」では、高等学校教育と大学教育の接続や連携については、必ずしも円滑とは言えないとの指摘がなされており、教育の連続性という観点からは、特に高等学校と高等学校卒業後の生徒の大半を受け入れる大学との相互の有機的な連携を通じた一体的な教育の改革・転換と、大学入学者選抜が期待されている。



★掲載論文について★

●大阪府教育委員会教育振興室高等学校課教務グループ

首席指導主事 柴浩司氏

大阪府は、少子化や学習ニーズの多様化を受け、府立高校の特色づくりと再編を狙って、「普通科総合選択制」「総合学科」「全日制単位制高校」「クリエイティブスクール」「国際・科学高校」などの新しい学科を設置している。また、次代をリードする人材育成のための研究開発重点校として「エル・ハイスクール」に指定。それを継承しての「進学指導特色校（Global Leaders High School）」の指定に伴う文理学科の開設。今年度には高校入試にTOEFLを導入することを発表するなど先進的な改革を進行している。

●教育センター附属高校

大阪府教育センター附属高等学校長 坂井啓祐氏

大阪府教育センター附属高等学校は、日本で初めて設置された教育センター附属の学校であり、同校では、学校所属の教員のほか、教育センターの指導主事も授業を担当している。

●文理学科

大阪府立北野高等学校校長 原田恵子氏

大阪府立北野高等学校は、大阪府立高等学校の特色づくりの一環である「進学指導特色校」10校に採択され、文系・理系の双方に対応した進学指導に特色を置いた専門学科である文理学科を置いている。

●国際・科学高校

大阪府立千里高等学校校長 林伸一氏

大阪府立千里高等学校は、国際理解の観点から、グローバルに活躍できる人材の育成を目指して、国際交流や実験・実習などに重点を置く専門学科を設置している。授業では、英語や情報機器の積極的活用を行い、実験・実習や語学の体験学習、プレゼンテーション力の育成などを重視するなど、個性的な教育を実践している。

●大阪府（高校）との高大連携

関西学院大学スーパーグローバルハイスクール支援担当事務局兼入試課長兼AO入試課長 尾木義久氏

関西学院大学は、大阪府教育委員会と包括協定を結んでいる。協定を結んだ目的や、関西学院大学が目指している府立高校との連携の形について、これまでの高大連携事業の展開を踏まえてご紹介いただく。

そこで、①教育の連続性の観点からの「高大連携」、②大
学入学者選抜を中心とする観点からの「高大接続」という二
つの側面から、高等学校教育改革の現状と大学に対する率直

な思いや期待の紹介を通じて各大学におけるアドミッション
ポリシー、カリキュラムポリシーに基づいた多様な大学教育
の方向性について考える。

大阪府における

「活力あふれる府立高校づくり」と「高大接続」

柴 浩司 ●大阪府教育委員会教育振興室高等学校課教務グループ首席指導主事

●はじめに

大阪府教育委員会は、教育改革プログラム（平成十一年四月策定）や「大阪の教育力」向上プラン（平成二十一年一月）により、特色ある府立高校づくりを進め、グローバル社会で活躍できるリーダーの育成や多様な社会経済基盤を支える人づくり、置かれている環境にかかわらず社会的経済的に自立して生きていく力の育成について取り組みを進めてきた。

また、平成二十五年三月には、大阪府教育振興基本計画を策定し、グローバル化の進展や社会経済状況の変化の中、これからも卓越性・公平性・多様性という三つの視点を大切にしながら、各府立高校の魅力や特色をさらに高め、府立学校が担うべき役割を確実に果たしていくことを打ち出している。

さらに平成二十五年四月には、小学校における「フォニックス」や高等学校における「TOEFL・iBTを活用した英語教育」などの導入に向け、全国に先駆けた英語教育改革

を積極的に進めている。

これらの取り組みの充実に向けては、高校三年生だけではなく、大学または大学院までの七カ年またはそれ以上の期間を見据えたキャリアデザインを構築する必要がある。

●特色づくりと高大連携

まずは、これまでの特色づくりについて紹介する。

大阪府教育委員会では、平成十一～二十年度には、少子化や学習ニーズの多様化を受け、府立高校の特色づくりと再編整備計画を進めてきた。この計画により「普通科総合選択制」「総合学科」「全日制単位制」「国際科学高校」など新しい学科を設置した。これらの学校においては、進路指導を充実させるとともに、将来の学び、研究を意識した大学での体験授業などが盛んに行われ、大学と高校との連携事業が進められた。





この期間に大阪府教育委員会は、大阪教育大学(平成十四年締結)をはじめ、立命館大学、関西大学など、計一四大学と包括的連携協定を締結した。この協定の目的は、生徒の大学理解、学習意欲の向上、教員の資質向上などであり、各学校においては、大学からの出前授業や大学研究室訪問などが実施された。

また、平成十五〜十九年度には、次代をリードする人材育成のための研究開発重点校として、一七校を「エルハイスクール」に指定。また、北野高校、天王寺高校、泉北高校、住吉高校がこの期間に国のスーパーサイエンスハイスクール(SH)に指定された(現在、大阪府のSSH指定校は一二校で全国一の指定校数を誇っている)。エルハイスクール、S

SHとも、課題研究や進路実現に向けた取り組みを進めるうえで、大学との連携が強化された。

●グローバルリーダーの育成を目指して

平成二十年七月に大阪府学校教育審議会により、これからの大阪の教育が目指す方向について、「卓越性(Excellence)」「生徒のもつ能力を最大限に伸ばすこと」と「公平性(Equity)」「全体として教育達成度を引き上げること」を高い水準ですべての学校が個性化を図ることを提言された。この答申の理念を、「大阪の教育力」向上プラン(平成二十一年一月)により具体化し、グローバルリーダーズハイスクール(GLHS)や大阪府教育センター附属高校を設置した。GLHSは、前述のエルハイスクールのうち一〇校を指定し、文理学科を設置した。文理学科は、教科横断的・探究的な学校設定科目を設定するなど、高度な学びを実現することを狙った学科で、生徒は、課題を設定し、仮説を立て、検証し、発表するというアクティブラーニングを行っている。この課程において、大学や企業、研究機関の研究者の方々から指導助言、評価を受けるようになり、高大連携が、スポット事業から、継続的な指導を行うものに変化している。特に、連携協定を結んでいる京都大学や大阪大学は、高い志をもつような講演会や生徒発表会の協力、メールによる課題研究相

特別連載 高校は今



談など、GLHSにとって、年間を通じてアドバイス・サポート機関となっていたらいい。

また、大阪府教育センター附属高校においては、教育センターの研究・研修機能と附属高校の教育活動とを直結し、一体となつて大阪の教育課題を踏まえた実践・研究を展開し、教員の指導力の向上

を図り、府内全体の教育活動の深化・充実を目指すことを目的に設定した。PISA型学力を育む探究活動に取り組んでおり、大阪府立大学やJAXAと連携した宇宙講座などを実施している。

●英語教育改革

グローバル化が急速に進む中、将来のグローバルリーダー

には、確かな学力、豊かな感性とともに、表現力や発信力、語学力が不可欠である。大阪府教育委員会では、英語学習のレベルを英語圏の大学への進学に匹敵するレベルに据え、海外でのアカデミックな環境下で成功できるレベルに英語四技能を高校三年間で引き上げるために、TOEFL・iBT英語教育をGLHSをはじめ、一七校で導入することとした。

導入にあたっては、TOEFL・iBT教育の指導方法・教材の開発するSuper English Teacher (SET)を募集し、平成二十七年から配置する予定である。

さらに府立高校入試の「英語」において、TOEFL・iBTなどの外部機関が認証した英語力判定のスコアなどを学力検査の得点として、各問のリード文も含めすべて英文にするなど入学試験を活用した小中学校の英語教育への改革を進めようとしている。

●まとめ——大学に期待すること

現在、各大学で大学入試改革が検討されている。高校の視点で言えば、大学が高校の学び、つまり、課題研究の取り組みや学びのプロセスをどのように評価してもらえるかという点である。これらの取り扱いについては、例えば、高校生を大学のハイレベルな教育環境で長期間課題研究を指導するグローバルサイエンスキャンパスのような取り組みが参考とな



る。高校生が高校三カ年のあと、大学・大学院までの期間をキャリアとしてデザインし、指導者も七カ年またはそれ以上の期間を見据えて生徒を育成する、いわば高校と大学を点で見るのでなく、「リレーゾーン」が存在する「高大接続」であることを期待したい。高校のときに学んだ学習内容を評価し、入学後に大学の単位として認定することや、「リレーゾーン」での学習を

入試に活用するなどの大学入試改革にも期待する。

また、英語教育については、国のグローバル人材育成戦略（平成二十四年六月）において、「四技能をバランス良く問うタイプの入試への転換」「一般入試でのTOEFL、TOEICの成績などの評価・換算」

「AO入試などの際にTOEFL、TOEICなどの活用を促進」が示されている。大阪府の英語教育改革と高大接続の視点からも、早急に検討導入されることを期待している。

現在、連携しているいくつかの大学の入試改革（特色入試導入など）において、教育委員会を通じて高校現場の意見を取り入れようとする動きがある。大学の先生方が高校教育現場を調査し、分析したうえで、入試改革や大学初年時教育に取り組むことは、目指すべき「高大接続」の方向と一致すると考える。これらの動きがさらに多くの大学に拡大することを祈っている。

●参考

大阪府教育委員会と連携協定を締結している大学（二三大学・平成二十六年五月現在）

大阪教育大学・立命館大学・関西大学・大阪学院大学・近畿大学・関西外国語大学・神戸親和女子大学・関西福祉科学大学・帝塚山学院大学・大阪樟蔭女子大学・大阪大谷大学・大阪工業大学・大阪府立大学・大阪体育大学・武庫川女子大学／同短期大学部・追手門学院大学・大阪総合保育大学／大阪城南短期大学・大阪市立大学・プール学院大学（同短期大学部）・大阪成蹊大学・京都大学・大阪大学・関西学院大学（締結順）

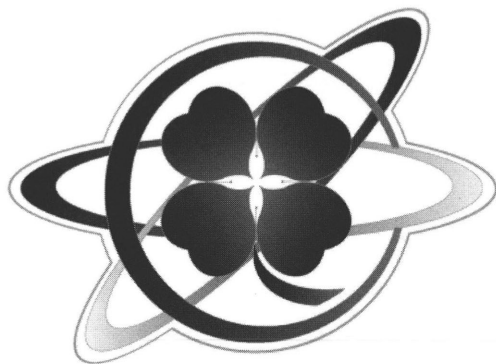
学びの創造「探究ナビ」

坂井 啓祐 ●大阪府教育センター附属高等学校長

●設立の理念

本校は、二万人を超える卒業生を輩出した大阪府立大和川高等学校の歴史と伝統を受け継ぎ、平成二十三年に全国初の教育センターと一体となった高等学校として開校した。大阪の教育を先導し、「共に学び、共に敬い、共に高まる」をスローガンに、新たな学びの創造をテーマに、生徒が

校章



主体となる授業づくりを、教育センターと一緒に、教育センターと一緒になって実施していく学校としてスタートした。この春、初めて卒業生を送り出したばかりの、まだまだ新しい学校である。

本校のキーワードに、校章にもデザインされている「学びのクローバー」がある。学びのクローバーは四つ葉で構成され、この四つ葉

学びのクローバー



に「発見」「探究」「感動」「自信」の四つの言葉が配置されている。これは、本校におけるさまざまな教育活動を通して、獲得してほしい学びを表している。

自分の目標に向かってチャレンジを続ける中で自己の可能性を発見し、学びを深めることで、学んだ知識や技能を最大限に活用する探究的な学習活動を行う。そして、自立への歩みを進めながら、仲間と共に全力で取り組み、やり遂げたという感動を仲間と分かち合い、仲間の中で自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識し、自己有用感を育み、たくましく生きる自信を獲得する。

さらに、獲得した自信を胸に、新しい目標に挑戦していく過程で、また新しい「発見」と出会い、探究、感動、自信へと無限に続くスパイラルから、無限の可能性を切り開き、夢と志の実現へと導いていくという、本校の理念を表しているのが「学びのクローバー」である。

●本校ならではの取り組み

この理念に基づいて立ち上げた教科が探究科である。学校で学んだことにはすべて正解がある。しかし、社会に出ると正解などなかなか見つからないことはかりである。それどころか、「どこに課題があるか」すらわからないことも少なくない。そのような事柄に「答え」を出すにはどうすればよい

かを学ぶのが探究科の探究ナビである。

もともと「正解」と言えるものはつきりしないのであるから、多くの人が「正解に近い」と思える意見をまとめていくしかない。そのためには、自分の意見を各自が持ち寄り、話し合いを

商品開発



を行う。当然のことながら、この「意見交換」は、単なる思いつきや、人から聞いただけのうわさを持ち寄るのではない。自分の意見には必ず思うだけの根拠がない。そして

て、その理由を、科学的な論文やきちんとした資料から根拠として示すことが必要である。

自分と正反対の意見があっても、それを頭から全部否定したのでは議論は深まらない。相手が根拠としているものに誤りはないのか、自分の根拠としているところと何が違っているのか、自分の意見に取り入れるべき部分はないか、と考えるながら話し合って、少しでも「正解に近い」、多くの人が納得できるものをつくりあげるのが、本校必修教科目の探究ナビであり、各学年二単位で実施している。

●探究ナビの内容（平成二十五年）

・一年次

一年次の探究ナビIでは、「人とつながる」をテーマとし、聞く力、調べる力、協働する力の育成を図る。

(1) 基本練習（聞く力の育成）

他者紹介、などかけを利用してのブレイン・ストーミング、「月で遭難した」と想定して合意形成実習を実施する。

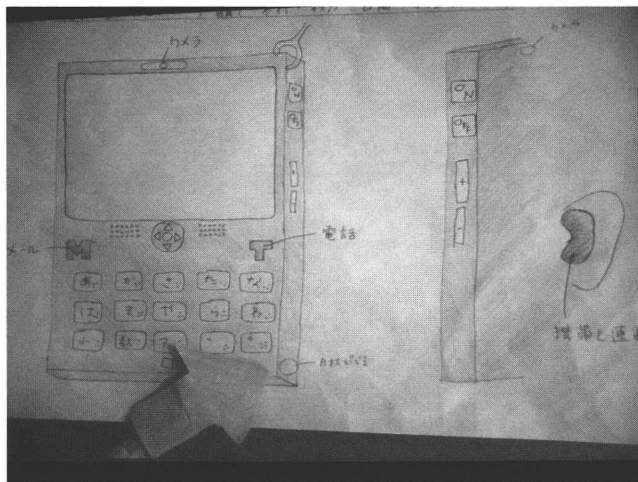
(2) 職業調べ（調べる力、伝える力の育成）

「人は何のために働くのか」から、職業調べやその職業に就く方法を調べ、ポスターを作り発表する。

(3) 調べ学習（調べる力、伝える力の育成）

事前に考えたことを博物館で調べ、感じたことなどをまと

商品開発でのプレゼンテーション



めて発表する。

(4) 商品

開発

（伝え

る力の

育成）

「こんな

携帯あった

らしいな

あ」をテー

マに、今の

携帯電話の

問題点の解

消だけでは

なく夢の携

帯電話の実

現に向けて、

機能やデザインだけではなく、商品名やキャッチコピーまで

考え発表し、専門家の意見を聞く。

(5) 演劇活動（協働する力の育成）

劇団の協力のもと、演劇的手法でプレゼンテーションを行



う。人間関係のない集団で、テーマ・役割・内容などを話し合いながら決め、芝居のプロットを考え、脚本を作り上げていく。最後は演劇で表現する。

・二年次

二年次の

探究ナビⅡ

では、「社会とつながる」をテーマとし、自分のもっている知識を社会とどう結びつけていくかを考えさせる。

(1) あび

こ探検

(社会

を見る)

地元の街

あびこへ繰

り出し、普段から見ているのに気づかないおもしろい所、きれいな所、気になる所を写真撮影し発表する。

(2) 修学旅行おすすめ調査

修学旅行中のクラス別自由行動時間のプランをグループごとに企画し、プレゼンテーションを行いプランを決定する。

(3) インタビュー実習

インタビューの手法を学び、「地域社会を見る」で必要となる知らない大人との話し方を練習する。

(4) 地域社会を見る

地域の公的機関の協力のもと、地域の福祉、防災、歴史や文化について知る。

(5) あびこの街を考える

「地域社会を見る」での経験をもとに、アンケートやインタビューなどから地域社会に対して新たな提案を行う。

・三年次

三年次の探究ナビⅢは、探究科の総まとめの位置づけとして課題研究を行う。

●成果と課題

実施回数が多い探究ナビⅠでさえ、今年で四回目の実施である。そのため、授業実施前と実施後のアンケート調査で、「あなたは今自分に次のような力があると思いますか」の質

表 「あなたは今自分に次のような力があると思いますか」の肯定的回答の伸び率上位

自分にあると思う力	授業実施前後での伸び率
伝えたい情報をわかりやすいように工夫して伝える力	27%
学校で学んだことや体験したことを自分の生活や周りの人たちの仕事に結びつけて考える力	22%
自分の考えをわかりやすく整理して、相手に理解してもらえるように伝える力	20%
自分の考えや意見を相手が納得するように伝える力	19%
人から言われるのではなく、やらないといけないことを見つけて、自分から進んで取り組む力	18%
言われたことをやるだけでなく、自分で目標を設定して、粘り強く行動する力	16%
目標を達成するために解決すべき問題を見つける力	15%

問を生徒に行うことで、実際にどのような力がついたのかを調べている。表に、肯定的評価の伸び率の高かったものについて挙げておいた。

以下は、探究ナビの授業を終えた生徒の感想である。

○間違いなくコミュニケーション力が上がった気がする。
四月のころの暗かった自分が、今はこんなに明るくて楽しい学校生活を送れていることがとてもうれしい。自分の成長をこんなに実感できるとは思ってなかった。

○探究ナビでは、自分の意見を言うこと、人の意見を聞くこと、そして協力してまとめることなどを学んだ。発表とか

演劇活動



探究ナビを通じて新しいリーダーシップのとり方を学びました。ただ自分だけが行動するのではなく、皆でやる。そのためには、相手の意見を尊重するのが大切だし、自分の意見を伝えやすくするのも大切です。探究ナビでさらにリーダーシップ

も多いし、そのたび緊張していたけど、慣れていくものだし、良い経験ができたと思う。
○私が成長したなと思うところは、リーダーシップについてです。もともと自分から行動するタイプですが、探

をうまくとれるように成長したな、と自分でも感じます。

○みんなに伝える力が成長したと思います。ボクの話術が上手だとみんなに評価されたりして、新たな自分を発見できたと思います。探究ナビでは、グループが一つになって協力し合い、助け合いながら発表ができ、なおかつ社会のためになりおもしろいところが、探究ナビの良いところだと思います。

○中学校のときは、誰かが決めてくれるやろとか、何でもいって思ってたけど、今では自分の思っていることとか、こうしたらもっと良くなるのとか、皆に伝えることができると、周りの言いくそうにしている人も言いやすくなると、班として良くなっていくということがわかりました。皆で話し合ったりする楽しさや、いい案につながったときのうれしさも知れて良かったです。

経済産業省が実施した調査によると、企業が学生に足りないと感じている力は「主体性」「コミュニケーション力」「粘り強さ」などであった。課題に根気よく仲間と協働して向き合うための力を求めている。生徒の興味・関心、能力や進路希望が多様化する中、このような社会が求める力をつけていくのが探究科の授業である。まだまだ始まったばかりの取り組みではあるが、生徒の感想にもあるように自分自身の成長が感じられる授業である。

一方、実施していく中で課題もある。授業として行われているので、当然評価を行わなければならない。従来から行われているペーパーテストだけでは測れない学力をどのように行うのかも課題である。この評価については、文部科学省の「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」事業として、教育センターと一緒に取り組んでいる。

また、コミュニケーション力と協働する力の育成を図ることを中心に授業展開を行っているが、一般教科で学習した知識や内容を探究科とどのようにリンクさせればいいのか、あるいは、探究科での学びの手法を一般教科に広げていくにはどうすればよいのかも課題になっている。

現在の高校生には、多様な進路希望があるとはいえ、本人・保護者とも、大学への進学を希望している者は多い。入学試験に合格するためには、知識や技能など狭い意味での学力が求められている。探究活動で身につけた興味・関心が学習意欲を高め、自ら学ぶ生徒の育成につながり、結果として大学入試にも対応できると考えてはいる。しかし、現在行われている入学試験を突破できる狭い意味での学力が、すぐに身につくというわけではない。探究科で培った「主体性」「コミュニケーション力」や「粘り強さ」を身につけた生徒を大学教育で活用していただき、本校での学びで培った力をさらに伸ばせるような教育を大学には期待したい。

探究的学習において求めたい 高大連携のあり方

原田 恵子 ●大阪府立北野高等学校校長

●はじめに

文部科学省が平成二十六（二〇一四）年度からスタートさせたスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業において、本校は全国五六校の一つとしてスーパーグローバルハイスクールに指定された。事業の目的は、「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教育に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身につけ、将来、国際的に活躍できるグローバルリーダーを高等学校段階から育成する」というものである。この事業の目的は、本校の教育の目的と合致するものであり、極めて自然な流れの中で計画を練ることができたが、この流れがいかに自然なものであるかを、本校の創設期からたどって説明していきたい。

●本校の沿革

本校は、明治六（一八七三）年四月に発令された大阪府令により、学業優秀な小学校卒業生を集め外国語を習得させる目的として、東本願寺難波別院（南御堂）内に創設された「欧学校」を鼻祖としている。「欧学校」発足後わずか一〇日で「集成学校」と校名を改称し、以後幾度となく制度の改変、校舎の移転、校名の変更などを経て、本年創立一四一年目を迎えた。

記録によれば、一人のアメリカ人と医学と英語を学んだ一人の日本人青年が集成学校最初の教員であり、生徒総員五一名、内男子三九名女子二二名で発足している。また当時の「集成学校規則」全一八条のうち第六条には「此学校ハ外国語学ヲ主トスルヲ以テ平常ノ談話ト雖トモ習熟ノ為メ洋語ヲ用ユ



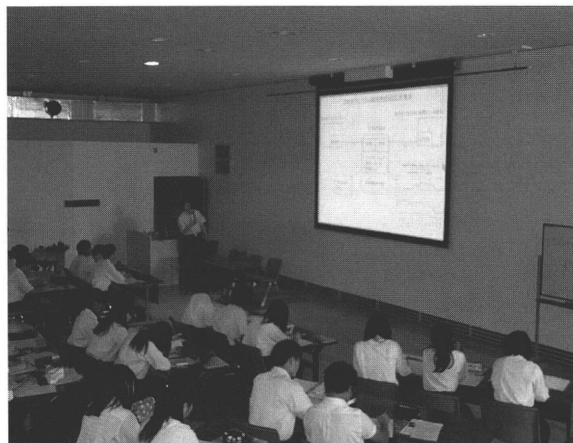
ルヲ善トス」と記されている。

明治五(一八七二)年に「学制」が發布され、学校では欧米風の学科を設け、翻訳型の教科書が尊重され、多くの外国人教師が高給をもって雇われ、多数の留学生が欧米に派遣されたと言われるが、これらは明治初期の文明開化の風潮が教育の面でも顕著であったことの表れであると思われる。

明治十(一八七七)年には「大阪府第一番中学校」となり、明治三十五(一九〇二)年に大阪府立北野中学校と改称。昭和二十三(一九四八)年には新しい学制のもと大阪府立北野高等学校として発足。平成十四(二〇〇二)年から平成十八(二〇〇六)年の間は文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けた。

一方、大阪府においても、少子化や学習ニーズの多様化に対応するための府立高校の特色づくりと再編が進められる中で、本校は平成十四(二〇〇二)年に大阪府教育委員会より「豊かな感性と幅広い教養を身につけた、社会に貢献する志を持つ、知識基盤社会をリードする人材を育成する」ため、「エルハイスクール」に指定された。さらに、平成二十三(二〇一一)年には、「進学指導特色校(グローバル・リーダーズ・ハイスクール)」に指定され、それまでの普通科に加え、「人文科学・社会科学・自然科学の各領域で、探究的な学習を行い、多面的な視点でものごとを考え、未知の状況にも的確に

SGH土曜の特別講座の様子



対応する力や、価値観や文化の異なる人たちと協調して国際社会で活躍する力を育む」ことを目標とする文理学科が併置された。

このように、本校はつねに時代の変化に対応し、次代を担うリーダーを育成し続けている学校なのである。

●本校の取り組み——高い学力・豊かな感性・たくましい体力を目指して

本校では、まず第一に、高い学力を身につけることができるよう「授業第一」を基本にし、六五分授業や探究的学習活動の充実、土曜日や長期休業期間の有効活用などを行い、すべての生徒に充実した学習環境を保障

特別連載 高校は今

している。また、一人ひとりの夢と志の実現に向けた進路指導や、参加・受講が可能な「大学との連携プログラム」も充実させている。さらに学習面にとどまらず、個性と可能性を大きく伸ばすさまざまな学校行事や活発な部活動、心のケアに配慮した教育相談活動を行っている。伝統に培われた実績とアカデミックな校風が知・心・体のバランスのとれた人間形成を実現させているのである。

生徒の興味・関心の幅を広げ、将来社会で活躍できる人材の育成を目指し、生徒が自らの夢と志を実現させ、社会に貢献できる分野が発見できるよう、一年生では「職業ガイダンス」を、二年生では「大学セミナー」を実施している。

「職業ガイダンス」では、「興味・関心のある職業」についての事前アンケート結果に基づき、人気の高い職業分野で現在活躍中の本校卒業生を一五〜二〇名程度招き、職業別のブースで約二時間のガイダンスを行っている。

「大学セミナー」では、本校卒業生の大学院生・学部生を一〇〜一五名程度招き、各学部・学科の研究内容について話をしてもらっている。大学との連携プログラムとしては、「知的世界への冒険」と題して、一年生を対象として生徒の知的好奇心を高めることを目的に、大学の各分野で活躍中の本校卒業生を講師として招き、学問・研究の一端を紹介してもらう講演会を実施、毎回五講座を開催している。ほかにも京都

大学研究室訪問や大阪大学公開講座の年間受講など、さまざまな取り組みを実施してきた。

●スーパーグローバルハイスクールとしての取り組みにおける 高次連携

文部科学省は、スーパーグローバルハイスクールの事業概要として「国際化を進める国内の大学を中心に、企業、国際機関などと連携を図り、グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、グローバルなビジネスで活躍できる人材の育成に取り組む高等学校を『スーパーグローバルハイスクール』に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める」としている。そして大学との連携として、「課題研究に関する指導を行う帰国・外国人教員などの派遣や、大学生によるサポート」を挙げている。

本校は「アジアと学びあうー夢を実現する国づくりー」をテーマとして「比較文化的アプローチ」「経済的アプローチ1・2」「歴史的アプローチ」の四つのアプローチで研究を進めることにしており、特に文理学科二年生の課題研究の時間を取り組みの中心に据えている。

そこで初年度の今年、課題研究の時間に、関西学院大学提供の英語による専門授業を三部構成で年間一二回実施してもらうことにしている。

第一部は「経済・企業の視点からの実証的研究。アジア展開の日系企業の経営上の問題点等にも触れる」という内容で、商学部教授とジェットロ海外調査部研究員に指導していただく。

第二部は「アジア社会の人種や文化の多様さを取り上げ、実態や特色を研究する。生徒たちが積極的に考え、議論する手法で行う」という内容で、社会学部教授に指導していただく。

第三部は「専門の研究者、駐大阪の外国人領事、外国人留学生在が、アジア社会と日本の関係をどうとらえているかという素材をもとに、アジアと日本の共通性や異質性を考えさせる。さらに国際機関や外交への関心や興味をもたせる」という内容で、国際学部教授、関西学院大学交換留学生、アジア経済研究所員、駐大阪の外国人総領事に指導していただく。これらの内容や指導者は、すべて関西学院大学がプログラムして提供してくれたものである。

また、京都大学工学部地球工学科国際コース提供の英語による専門授業も、年間五回程度実施してもらうことになっている。

そのほかにも、土曜日や長期休業期間に、多くの大学や研究所との連携で講演や海外フィールドワークを実施することになっているが、これらの取り組みすべてに共通して言えることは、大学側からの主体的・積極的プログラムの提供がなけ

れば成立しない取り組みであるということである。

●おわりに

本校の生徒のほぼ一〇〇％が四年制大学へ進学する。しかし、本校の進路指導は単なる受験指導ではない。一人ひとりがどのような人生を送りたいのか、自分の夢をかなえるためにはどうすればよいのか、それを考えていく手助けをするのが本校の進路指導である。そのため、今まで長年にわたって本校の卒業生の協力を得てさまざまな高大連携の取り組みを行ってきた。これらは言ってみれば、卒業生個人の善意と協力により実施できてきた高大連携である。

今回スーパーグローバルハイスクールとしての取り組みで、多くの大学から「プログラム」としての連携協力を提供していただけることになった。本校が必要としている協力内容と大学側が提供できる内容とを互いに出し合い、何度も話し合う中でできあがったプログラムである。大学側へは本校の状況や生徒の実態を知ってもらい、本校は大学の状況と求める学生像を知ること、互いに理解し合ってつくりあげることができた高大連携のプログラムではないかと考えている。

今後、このように高校と大学が具体的な内容で、何度も話し合いつくりあげていく高大連携のあり方を模索していきたい。大学側からの積極的な協力を期待するものである。

SELHiとSSHの経験から考える

林 伸一 ●大阪府立千里高等学校校長

●千里高校の沿革

大阪府立千里高校は、一九六七（昭和四十二）年に大阪府六五番目の普通科高校として開校した。本校は、戦後日本の大規模住宅開発のさきがけである千里ニュータウンのほぼ中央に位置している。教育方針は、「真理と正義を愛する人間の育成をめざし、淨く直く明るい性格の陶冶につとめる」「信頼と敬愛の上になつ人間の育成をめざし、人間のふれあいを通じて情操の陶冶につとめる」であり、本校はこれに基づき教育に取り組んでいる。また、創立が高度経済成長期であり、未来志向的な地域に位置していることなどから、当初より教育活動の中に進取の気性があり、国際教育と英語教育に対する関心が高かった。そういった背景は、一九九〇（平成二二）年の国際教養科二クラスの並置へとつながった。

●国際教育と英語教育

千里高校が今日行っている国際教育と英語教育は、国際教養科設置以降蓄積した実践と、「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）」の研究指定（平成十四～十六年度）を受け開発した指導法が基礎となっている。本校は、この時期にコミュニケーション能力をより向上させ

るための指導法を開発した。併せて、普通科を含むすべての英語の授業の教材・資料などと指導法を統一した。それらについては、電子機器やインターネットの活用により効率と効果を高めるなどの改良を加えつつ、現在も引き継いでいる。

二〇〇五（平成十七）年には、国際教養科を並置する普通科から、国際文化科と総合科学科という二つの専門学科により構成される専門高校に改編された。この改編は、大阪府教育委員会が一九九九（平成十一）年四月に策定した「教育改革プログラム」に基づくものである。同プログラムは、高校における課題の一つとして専門学科に対するニーズの高まりを指摘するとともに、コミュニケーションツールとして外国語と情報機器を活用する力と、科学技術、経済、文化などの分野においてグローバルに活躍するために求められる基礎的な資質と学力を育成する新たな専門高校設置の必要性を示したのである。

●専門高校への改編と新たな課題

専門高校への改編に伴い、次の新たな課題が生まれた。一つは、国際教養科二クラスから国際文化科四クラスに拡大したことへの対応である。より多くの生徒に対し、高い水準の



国際教育と英語教育を行うための指導法の開発が必要となった。二点目は、総合科学科における指導法の開発である。そして、三点目は、それぞれ文系・理系が比較的関心が高く得意でもある生徒に対し、どのように効果的に文・理両方の高い学力を育成し、かつそれぞれの専門性を高めるかという課題である。

千里高校においては、これらの課題に 대응するため、前述したようにSELHiを受け整備・開発した指導法の改良に努めるとともに、大阪府教育委員会・文部科学省によるその他の新たな研究指定などを活用してきた。また、二〇一〇（平成二十二）年には、「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の研究指定を受け、理数教育や理数系の課題研究などの取り組みの充実を図っているところである。

●SELHi以降今日まで引き継いでいる指導法

SELHiを受け整備・開発し、今日まで引き継いでいる主な指導法は次のとおりであり、両学科ともに、英語の必修・選択の授業において実施している。

- ・CALLやCALといった語学・情報教育専用教室及び一・二年のホームルーム教室に設置した大型ディスプレイを活用した指導
- ・ペアやグループでのトピックトーク。ディスカッション、ダイベート
- ・時事問題についてのジャーナル・ライティング、長期休業中のエッセイ・ライティング、パラグラフ・ライティング

- ・インターネットなどを利用して調べた世界各地における時事問題に係るプレゼンテーション

- ・模擬国連

- ・インターネットなどを利用した海外の高校生とのメール交換

- ・海外の高校生らによる本校訪問時における日本文化紹介などのプレゼンテーションやディスカッション

以上の例からもおわかりいただけるように、指導においては、視聴覚機器・情報機器の活用とともに課題研究の要素をできるだけ取り入れ、国際的課題や社会的課題と自分の生き方について関わらせ、考えることができるよう工夫している。また、昨年度より新入生全員にタブレット端末を購入してもらい、それを活用した反転授業等の試みを英語科を中心に始め、他教科や課題研究の指導にも順次広げる計画である。

本校独自のリスニング診断テストやスピーキング診断テストによる学習評価も行っている。リスニング診断テストについては、SELHi研究指定時に、既存の英語運用能力テスト（ACE: Assessment of Communicative English）などとの相関を検証した。この数年間は、大阪府教育委員会による「使える英語プロジェクト事業」などによる後押しもあり、より高度な英語運用力を育成するため、TOEFLIBT Practiceによる評価も行っている。

そして、本校はいわゆる修学旅行をやめ、五泊六日の研修旅行を実施している。国際文化科の生徒全員が、オーストラ

リアにおいて二泊三日のホームステイと高校交流を柱とした研修を、総合科学科の生徒全員が、ハワイ島においてマウナケア山頂付近における星空観測と研究施設見学を柱とした研修を行っている。研修を通じ、生徒はそれぞれの関心の高いテーマについて、主に英語を用いながら学ぶのである。希望者を対象とした英国や米国における語学研修や交流も実施しており、いずれの学科の生徒も参加できる。また、毎年度、両学科合わせて数名の長期留学生がおり、海外の高校生や大学生による短期間の訪問も数回ある。

さらに三月中旬には、課題研究発表会を実施している。両学科の主に二年生が、パワーポイントなどを活用した課題研究の発表や、英語によるデイベートなどを行う。生徒全員対象や学科別の講演も実施している。延べ四日にわたるその期間には、発表準備も含まれる。

●SSHと総合科学科における指導

本校は、二〇一〇（平成二十二）年、文部科学省よりSSHの研究指定を受け、「科学への興味・関心を高め、自ら科学的に探究する力の向上を図り、将来、科学・技術の幅広い分野で活躍し、国際社会の発展に貢献できる人材の育成」を目標に指導法の研究開発を進めてきた。指導の柱は、課題研究の充実、研究発表大会などへの積極的な参加、大学などの研究者による講義（年間数回）、希望者を対象とした国内外における研修の実施（年間数回）などである。

課題研究については、理数教科の指導内容に関わるテーマ

や先輩が取り組んできたテーマをさらに深めるよう生徒に促し、質の向上を図っている。また、理科教員全員がいずれかの国内外研修の引率・指導を担うこととし、研修を通じ教員と生徒が研究テーマや、進路や生き方について深く語り合えるよう工夫している。また、多くの取り組みにおいて、連携大学の先生による指導・支援を受けている。

希望者を対象とした海外研修や国際交流に係る取り組みとしては、米国先端科学研修（夏季八日間）、台湾科学研修（冬季五日間）、日韓合同調査（夏季四日間）、米国VEXロボティクスチャレンジ大会参加などがある。二〇一三（平成二五年）年度は、高校化学グランドコンテストにおいて文部科学大臣賞をいただくとともに、日本代表として台湾国際科学フェアに参加する機会を得た。本校生チームは、化学部門において英語による発表と質疑応答を行い、二位をいただいた。

●学校教育自己診断の結果に見られる変化

学校教育自己診断の中のいくつかの問いに対する肯定的回答（よくあてはまる・ややあてはまる）について、SSH指定前である五年前と比較したデータは表のとおりである。なお、学校教育自己診断による調査を始めた二〇〇八（平成二〇）年度も二〇〇九（平成二一）年度とほぼ同様の結果である。

学校教育自己診断の結果より、SELHiやSSHにおいて研究開発した指導法について、効果があったと言えるのではないかと考えている。大学入試センター試験の英語と理科の成績についても、その後継続して平均を上回るようになった。

(単位%)

表

問い	2009 (平成21)年度			2013 (平成25)年度		
	全体	国際	総合	全体	国際	総合
将来の進路や生き方について考える機会がある	67.3	72.0	61.2	81.0	81.0	80.9
国際性を養う機会が多い	86.2	93.1	77.4	87.9	88.5	87.2
理科の授業で力を付けることができる	75.6	74.7	76.8	81.8	77.5	86.5
英語の授業で力を付けることができる	82.6	91.1	71.6	86.6	91.7	81.2
課題研究は知的好奇心を高めている	60.9	59.3	62.9	69.4	64.7	74.4

た。また、二〇一三(平成二十五)年度には、前記の高校化学グラウンドコンテストにおける受賞をはじめ、英語、ドイツ語、スペイン語の各全国コンテストにおける優勝・準優勝、野村総合研究所主催小論文コンテストにおける優秀賞受賞、米国VEXロボティクスチャレンジ大会における審査員賞受賞など多くの成果があった。

●SELHiとSSHの取り組みについての評価

学校教育自己診断の結果を見ると、前記五項目には相関があり、特にSSHの取り組みによる影響が強い総合科学科の生徒の回答結果にそれがよく現れていると思う。本校がSSHの取り組みにおいて重視したことは、端的に述べると、生徒の関心の高いテーマや生徒が設定した課題研究を軸とした、国内外の大学などの研究者、教員、先輩による指導・助言や、そういう人たちとの宿泊を伴う交流であった。生徒はそれらを通じ、もともと比較的高かった科学的関心をより高めるとともに、授業に対しより前向きになり、理科だけではなく英語についても学力が伸長したと実感するようになったのでは

ないだろうか。

また、「将来の進路や生き方について考える機会がある」という項目に対する総合科学科生徒の肯定的回答が二〇%近く向上したことをうれしく思っている。その問いに対しては、国際文化科の生徒も約八〇%が肯定的な評価をしている。けれども課題研究については、総合科学科に比べ肯定的評価があまり向上していない。そこで、本校としては、国際文化科における課題研究の質を高めるため、現在、テーマ設定と調査研究、論文作成と発表に至る指導法の開発と、指導担当者による共有を進めているところである。

●高大連携と高大接続に期待すること

私は、SELHiやSSHなどの研究指定を受け開発した指導法により、本校生は、外国語と情報機器を活用する力と、グローバルに活躍するために求められる力を伸長させるとともに、卒業後の進路や生き方についてより深く考えるようになったと考えている。そのため、私は、文系・理系それぞれに係る研究指定事業が拡大され、教科指導や課題研究の分野における高大連携が進むことを期待している。また、後期中等教育期の子どもの心身や認知の発達についての研究を充実させ、彼らにより適切な学習経験を提供できるようにしたいと思う。そして、大学入試においては、大学入学後の研究などに係るアイデアや、高校時代の思索や研究がよりよく測られるものになってほしいと考えている。

SGH校・大阪府教育委員会との高大連携と入試改革

——国際化に重点を置く大学として

尾木 義久 ●関西学院大学スーパーグローバルハイスクール支援担当（特命）

●実践型「世界市民」育成プログラム

関西学院大学の実践型「世界市民」育成プログラムが、平成二十四年度文部科学省国際化拠点整備事業補助金グローバル人材育成推進事業（全学推進型）に採択された。このプログラムは、平成十六年から国連ボランティア計画（UNV）との協定により実施している国連学生ボランティアの実績と成果に基づき構築されたプログラムである。

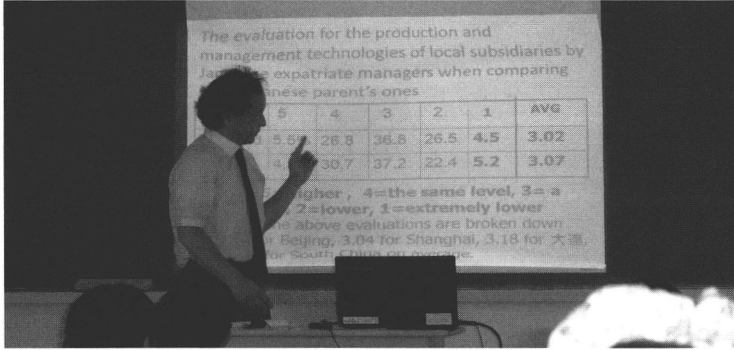
国連ユースボランティアの派遣国は、ウクライナ、ボスニアヘルツェゴビナ、サモア、ナミビア、バングラディシユなど紛争当事国や発展途上国であり、学生はこれらの国にある国連事務所で約半年間、広報、情報技術に関する社会貢献活動に従事する。派遣される学生には英語によるコミュニケーション能力はもちろんのこと、現地国連事務所において業務

に従事するために必要な幅広い能力が求められる。プログラム担当者である関谷武司教授の言葉を借りれば、「国連ユースボランティア派遣学生には英語が話せることは当然として、問題を発見し課題解決する能力、そして行動力、さらに確立した人間であること」が求められている。

平成二十六年文部科学省スーパーグローバルハイスクール事業（以下、SGH事業）においては、「課題研究」が高等学校で開発する教育プログラムの中心に据えられており、課題研究を通じて「課題発見・解決能力」を涵養することに焦点が当てられている。このことから考えると、

- (1) 本学の実践型「世界市民」育成プログラムや、創立以来培ってきた国際教育のノウハウがSGH事業に大いに寄与できる。





アジア探究文系講座において、関西学院大学の教員が英語授業を担当する。日本の製造業の中国・タイへの進出状況をケーススタディしながら、対外直接投資・ライセンス契約など進出形態の比較、内部化選好と外部化選好の比較、好業績の進出例とそうでない場合の比較などについて英語による授業を実施した。

(2) 本学が文部科学省の平成二十三年度大学の世界展開力強化事業、平成二十四年度グローバル人材育成推進事業の二つに指定を受ける国際化を重点とする大学である。以上の二点を踏まえ、本学がSGH事業に取り組みようとする

高等学校
 に対して支
 援を行い、
 社会に貢献
 することは
 当然の使命
 であると学
 長が判断し
 た。

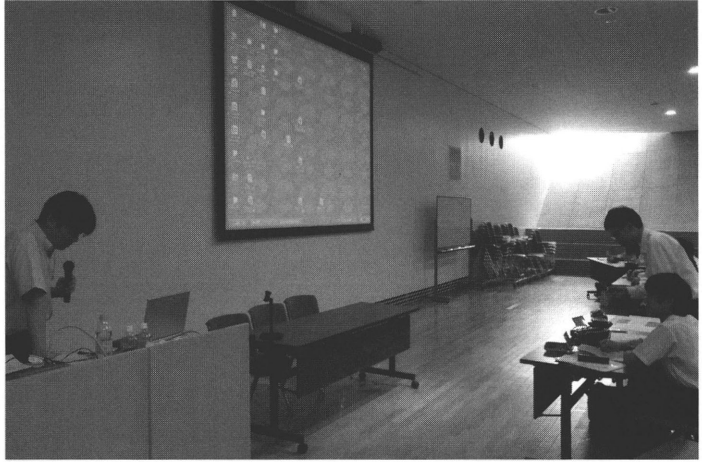
● SGH
 事業に取
 り組む高
 等学校へ
 の支援
 SGH事
 業に取り組
 むようとする

高等学校への支援にあたっては、学長を中心に全学的なコンセンサスを形成しながら、派遣教員や提供内容についての検討を重ねた。その結果、本学は平成二十五年二月の高等学校のSGHへの申請にあたって、二二校一機関、延べ約八〇名の教員の協力を高等学校に申し出ることとなった。その後、本学が支援協力を申し出た高等学校のうち五校がSGH校に採択され、七校がSGHアソシエイトとなった。

本学が協力を行う高等学校のうち、大阪府からは北野高等学校、三国丘高等学校がSGH校の指定を受けた。現在、両校でのプログラムがスタートしているが、北野高等学校を例にすれば、本学教員三名（帰国・外国人教員を含む）、ジェトロより外部専門家二名、外国領事館より一名が、「アジアと学び合うー夢を実現する国づくりー」をテーマとした課題研究での英語による授業を担当することになっている。

また、大阪府教育委員会との連携事業では、教育学やグローバル教育を専門とする五名の教員が、北野高等学校、三国丘高等学校で実施するSGHのプログラムにより、生徒が内面的にどのように成長したかを測定するための外部評価を担当する。

こうしたSGH事業での関西学院大学と府立高校、大阪府教育委員会との関わりを背景に、大阪府教育委員会との間に包括的な連携協定が平成二十六年四月に締結された。



連携する事項は

- (1) 高校生を対象とする多様な学習機会の提供
- (2) 本学の学生による学校教育活動への支援の推進
- (3) 教育上及び研究上の諸課題に対応した調査研究の実施
- (4) その他双方が連携に必要と認める事項

協定の目

的は、「関西学院大学と大阪府教育委員会は、大学及び高等学校における教育の課題に関し、連携して必要な対応を行うことにより教育及び研究の充実、発展に資するこ

ととなっている。

本学はこの協定に基づき、SGH指定校だけではなく、SGHアソシエイトに指定された高等学校や、さらに今後グローバル化を目指しSGHへの申請を予定している高等学校への支援を行いたいと考えている。特にSGHアソシエイトは、次年度以降のSGHへの指定を目指し実質的な取り組みを本年度からスタートしたいという意向をもっているケースも多い。予算の制約のある中で、グローバル化のための教育事業を展開していく高等学校に対して、本学は可能なかぎり支援をしていきたい。

また、SGHのプログラムにおいて、生徒は高等学校三年終了時まで課題研究に取り組むことが求められている。大学入学試験を控えた高校生にとって、現状では、課題研究と大学受験の両立は大きな課題でもある。

●グローバル入学試験

本学は、昨年より五つのカテゴリからなる「グローバル入学試験」を導入した。その入学試験とは、

- (1) 国際貢献活動を志す者のための入学試験
- (2) 英語能力・国際交流経験を有する者を対象とした入学試験
- (3) インターナショナル・バカロレア入学試験

北野高等学校におけるSGH関連講演「アジアの広告」
関西学院大学社会学部難波功土教授



広告の制作から世に出るまでの仕組みの説明のあと、広告賞の受賞作を中心に映像
広告事例を参加した生徒、保護者、教員に多数提示。広告を研究対象とする生徒への
アドバイスも行った。

- であり、
- (4) グローバルキャリアを志す者のための入学試験
 - (5) グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験

① TOEFL、TOEIC、GTEC、IELTS、英検
などの英語外部検定試験の実績

- ② 海外留学経験
- ③ 高等学校模擬国連での取り組み
- ④ 科学技術オリンピック
- ⑤ 国際バカロレア取得者、取得見込み者など、高等学校での学びの成果を、

提出書類、論述審査、面接などを通じて多面的に評価する。

AO入学試験と異なる点は、入学後に本学の実践型「世界市民」育成プログラムで学ぶことを求めている点である。高等学校での学びを、大学に入学後もさらに高いレベルで継続し、グローバルな舞台で活躍できる人を育成することを目的とした高大接続のための入学試験である。平成二十八年度入試からは、国際貢献活動を志す者のための入学試験において、SGHに指定された高等学校で、課題研究に取り組んだ実績を有する生徒も出願できるようにした。社会的に関心のあるグローバルな課題に取り組んだ生徒を評価し、高大七年間の接続により国際社会において貢献できる能力を高め、グローバル人材を育成しようという明確な趣旨に基づく入学試験である。

本学はこれととりかかりとして、現在、検討されている到達度テストを利用した入学試験の導入と、多面的な評価を行う入学試験の実施など、高大接続・入試改革の取り組みを、学長を中心に積極的に進めていく。

*1 平成二十五年より関西学院大学に国連ユースボランティア派遣日本訓練センターが設けられ、国連学生ボランティアを国連ユースボランティアと改称し実施している。